

第17回群馬小児がん研究会抄録

日 時：平成 20 年 8 月 22 日 (金)
会 場：前橋商工会議所会館 3 階 Lily の間
当番幹事：畠山 信逸 (群馬県立小児医療センター放射線科)

〈特別講演〉

座長：畠山 信逸 (群馬県立小児医療センター放射線科)

MRI を使用したがん診断 —PET-CT と比較して—

堀越 浩幸先生 (群馬県立がんセンター
放射線診断部 部長)

〈一般演題〉

座長：宮脇 修一 (群馬県済生会前橋病院 内科)

1. 造血幹細胞移植を受ける児の母親の心情の変化と看護の検討

松本 梢 (群馬大医・附属病院・
小児成育医療センター)

造血幹細胞移植を行う際、児は無菌室での治療となり、母子分離が余儀なくされる。今回、造血幹細胞移植を受ける乳児の母親の治療中の心情を評価し、必要とされる看護について検討した。9ヶ月の乳児白血病の児の母親1名を対象とし、練習入室前～退室後1週間を区切り、心理測定尺度・自由記載を用いて気持ちの変化を評価した。

今回の結果より、母親の感情は、児の状態に左右されることを理解し、援助していくことが必要であると考えられた。また児の状態に集中することで、自分に対するケアに注意が払えなくなることが明らかになり、母親の体調にも気遣いながら援助していくことが重要であると考えられた。さらに、母親も看護援助の対象とし、無菌室に入室してもらうことが児の成長・発達においても重要であること等が明らかとなった。

2. 親友の死を経験した患児への援助

石川 陽子 (群馬大医・附属病院・
小児成育医療センター)

当病棟には小児がんの治療を受けている患児が多数入院しており、治療は長期に及ぶことが多く、仲良くなった他児が亡くなるケースは少なくない。化学療法や放射

線療法などの治療を受けている子どもたちが、自分と似た境遇の友人の死に直面した場合の精神的ショックや、後の闘病生活に対する意欲の減退の可能性を医療スタッフや家族が危惧し、友人の死を知らせずに隠すことが多い現状がある。

本事例も、家族の意向を確認した上で、当初は友人の死を知らせずにいたが、患児は医療者や家族の様子を敏感に捉え、友人の死を感じ取る様子が見られたこともあり、数か月後に事実を伝えることになった。年齢でみた一般的な死の概念と友人の死を知らせる方法、知らせた後のサポート方法、課題を明らかにすることを目的とし、研究を行ったので報告する。

3. 化学療法中の口腔ケアの再検討 —生理食塩水含嗽への変更に向けて家族の気持ちを考える—

大須 智恵, 黒岩 徹, 大石 奈櫻
飯塚もと子

(群馬県立小児医療センター 第三病棟)

木下 樹 (同 歯科)

外松 学 (同 血液腫瘍科)

【諸言】血液腫瘍患児のオーラルケアで特に重要なのは、ブラッシングによるプラークコントロールである。最近では、ブラッシングを徹底することで、安易に含嗽剤を用いないという方針の施設が増加している。当科では、食後のブラッシングとイソジンガーグル含嗽を実施してきたが、昨年度の研究において、口腔衛生管理について患児・家族・看護師の意識と手技の向上を図ることで、より質の高い、効果的なオーラルケアの実践を確立することができた。今回、含嗽剤を中止することに対する家族の不安に配慮しながら、イソジンガーグル含嗽から生理食塩水含嗽への変更が実施できたので報告する。

【対象】化学療法施行中の患児 (1歳～18歳の9名) ALL: 4名, 肝芽腫: 1名, 横紋筋肉腫: 2名, 腎芽腫: 2名 【倫理的配慮】研究への参加は自由意志であり、個人が特定されないよう配慮することを紙面に説明し、患児または家族の同意を得た。【方法】毎食後のブラッシングは、含嗽剤変更に関わらず、同様に継続し含

嗽剤のみイソジンガーグルから生理食塩水に変更した。イソジンガーグル含嗽と生理食塩水含嗽後の口腔内細菌の変化を調べるため、各々含嗽を実施した直後と2時間後に、舌背部より口腔内の検体を採取し、菌種・菌数の変化を比較検討した。また、その結果を患児・家族に示し、患児・家族の気持ちの変化についてのアンケート調査を実施した。【考察】近年、イソジンガーグル含嗽の継続により、ヨードの蓄積・耐性菌・色素沈着などが問題となっている。しかし、患児・家族は、単にイソジンガーグル含嗽から生理食塩水含嗽へ変更することの説明を医療者から受けても、含嗽剤変更による口内炎悪化への不安が生じる恐れがあると思われる。今回、含嗽剤の変更前後での口腔内の培養結果を患児・家族に示すことにより、不安の軽減に努めながら、生理食塩水含嗽に切り替えることができたと考えられる。今後も、さらに質の高いオーラルケアを進めていく必要がある。

4. 局所放射線治療と DeVIC 療法を施行した鼻 NK/T 細胞リンパ腫の小児例

柴 徳生, 田村 一志, 塚田 昌大
金澤 崇, 荒川 浩一

(群馬大院・医・小児生体防御学)

【緒言】鼻 NK/T 細胞リンパ腫は極めてまれな病型である。今回、一小児例を経験したので報告する。【症例】1歳男児。左鼻出血、鼻閉および発熱と左鼻根部から頬部にかけて発赤と腫脹が出現したため耳鼻科を受診。左鼻腔内に腫瘍性病変を認め、生検を施行したところ、病理診断にて鼻 NK/T 細胞リンパ腫の診断をえた。病期診断としては、PET-CT にて左鼻腔、両側頸部リンパ節に集積を認めた。骨髄検査では腫瘍細胞はみとめず、以上より Stage II と診断。鼻腔原発巣および頸部リンパ節に対して局所放射線照射後、DeVIC 療法(3コース)を施行した。発症後約1年を経過し、現在寛解を維持している。【結語】貴重な症例であり、詳細な経過観察とともにさらなる症例の蓄積が望まれる。

座長：西 明 (群馬県立小児医療センター外科)

5. 生検後急速に増大した幼児期発症肝血管内皮腫の女児例

朴 明子, 佐野 弘純, 山田 佳之
外松 学, 林泰 秀

(群馬県立小児医療センター 血液腫瘍科)

黒岩 実, 鈴木 則夫 (同 外科)

畠山 信逸 (同 放射線科)

平戸 純子 (群馬大院・医・病態病理学)

幼児時に発症し、血管肉腫と類似した臨床経過を辿っ

た肝血管内皮腫の女児例を経験したので報告する。症例は3歳女児、肝左葉原発の腫瘍を認めた。肝生検を施行したが、約2週間後より腫瘍の増大を認めた。PSL、放射線照射に続いてVCRの投与を行い、腫瘍は縮小傾向となった。腫瘍が左葉に局限したため拡大左葉摘出術を予定したが、新たに多発結節を認めた。母をドナーとする生体肝移植を施行し、術後の経過は順調である。幼児期発症の肝血管内皮腫は非常に稀であり、予後は不良である。転移巣がない場合は肝移植が治療の選択肢の一つとなる。

6. 前縦隔に発生し左腕頭静脈を広く巻き込んでいた小児脂肪芽腫の一例

高坂 貴行, 田中司玄文, 茂木 晃
高橋 篤, 桑野 博行

(群馬大院・医・病態総合外科学)

【はじめに】脂肪芽腫は乳幼児に好発する比較的まれな腫瘍である。今回われわれは、左前縦隔に発生し、腕頭静脈を巻き込んでいたため合併切除を要した脂肪芽腫の一例を経験したので報告する。【症例】症例は1歳6カ月の男児。肺炎で入院加療中に胸部異常陰影を指摘された。CTで左頸下部から前縦隔に約60mm大の腫瘍を認め、左腕頭静脈、頸静脈を巻き込んでいると考えられた。またMRIでは脂肪成分より成る腫瘤像を呈していた。画像所見より脂肪芽腫の診断で、手術を施行した。胸骨縦切開を行い観察すると、腫瘍は手拳大で、左腕頭静脈～鎖骨下静脈～内頸静脈を巻き込んでいたため、それぞれ結紮切離し腫瘍を摘出した。術後左肺、胸腔、上半身にリンパ液貯留を認めたが、利尿剤投与で徐々に軽快し、退院となった。

7. 腎芽腫における腎温存手術の実施可能性と長期的有用性に関する前方視的グループ研究の提案

池田 均, 田原 和典

(獨協医科大学越谷病院 小児外科)

野崎美和子 (同 放射線科)

島田 憲次 (大阪府立母子保健総合医療センター 泌尿器科)

設楽 利二 (総合太田病院 血液腫瘍科)

中井 秀郎 (自治医科大学 小児泌尿器科)

大喜多 肇 (国立成育医療センター研究所)

腎温存手術が腎芽腫治療後の腎不全発症を回避できるとの仮説をもとに、腎温存手術の実施可能性と有用性を前方視的グループ研究により検証することを提案する。対象は病期IまたはVとし、生後6ヵ月以上、15歳以下の未治療の症例とする。化学療法後に腎温存腫瘍摘出術を行い、術後治療を継続する。Primary endpointは腎温存